慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「蚊とはえのいない生活実践運動」と地域社会 : 阪急武庫之荘住宅地を事例に
Sub Title	The new life movement "better life without mosquitoes and flies" and the local community : the case of Mukonoso residential area
Author	出口, 雄大(Deguchi, Yūdai)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2021
Jtitle	三田学会雑誌 (Mita journal of economics). Vol.113, No.4 (2021. 1) ,p.503 (81)- 524 (102)
JaLC DOI	10.14991/001.20210101-0081
Abstract	本稿は，戦後日本で展開した「蚊とはえのいない生活実践運動」について，阪急電鉄が建設した武庫之荘住宅地を事例に，地域社会の視点から検討したものである。主に「近代家族」から成る武庫之荘住宅地では，家内領域を担う女性が「蚊とはえのいない生活実践運動」を主導すべきであると公共領域を担う男性から認識されたものの，「近代家族」であるがゆえに各世帯の独立性が高く，女性の組織化は困難であった点を明らかにした。 This article examines one of the new life movement, "better life without mosquitoes and flies" in post-war Japan from the perspective of the local community. Residents of the Mukonoso Residential Area, which was built by the Hankyu Corporation, suffered from mosquitoes and flies which came from the surrounding farming villages. In the Mukonoso Residential Area, which was inhabited mostly by modern families, men, as actors in the public sphere, determined that women, as actors in the domestic sphere, should deal with this problem. However, it was difficult for women to actively participate in these local community issues because women who were responsible for domestic duties and were therefore busy with housework and childcare.
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20210101-0081

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」113 巻 4 号（2021 年 1 月）

「蚊とはえのいない生活実践運動」と地域社会
――阪急武庫之荘住宅地を事例に――

出口雄大 *

（初稿受付 2020 年 11 月 30 日，査読を経て掲載決定 2021 年 1 月 7 日）

The New Life Movement “Better Life without Mosquitoes and Flies” and the Local Community: The Case of Mukonoso Residential Area

Yudai Deguchi *

Abstract: This article examines one of the new life movement, “better life without mosquitoes and flies” in post-war Japan from the perspective of the local community. Residents of the Mukonoso Residential Area, which was built by the Hankyu Corporation, suffered from mosquitoes and flies which came from the surrounding farming villages. In the Mukonoso Residential Area, which was inhabited mostly by modern families, men, as actors in the public sphere, determined that women, as actors in the domestic sphere, should deal with this problem. However, it was difficult for women to actively participate in these local community issues because women who were responsible for domestic duties and were therefore busy with housework and childcare.

Key words: New Life Movement, Modern Family, Urbanization, Local Community, Pluvial Flood

JEL Classifications: N55, N95, Z13

＊ 慶應義塾大学経済学部
Faculty of Economics, Keio University

はじめに

本稿は，戦後日本で展開した「蚊とはえのいない生活実践運動」に関して，地域社会の視点から実証的に分析することを課題とする。

「蚊とはえのいない生活実践運動」とは，1950 年代の日本で隆盛した新生活運動の一つである[(1)]。敗戦後の日本では，GHQ 主導による公衆衛生行政が展開した[(2)]。蚊・ハエの媒介に伴うマラリアや日本脳炎，ポリオなどの感染症対策の一環として，1949 年度までそ族昆虫駆除事業に 5 億円規模の補助金が交付された。しかしながら，1950 年の伝染病予防法の一部改正に伴い，従来の補助金方式は打ち切られた。これを契機に，地域社会の組織的な活動を主体とするモデル地区事業として，「蚊とはえのいない生活実践運動」が本格的に展開することになる[(3)]。1955 年 6 月には，当時の鳩山一郎内閣が「蚊とはえのいない生活実践運動」を閣議決定し，国民運動として位置付けた。その際，「蚊とはえのいない生活を実現しようとする国民の自主的な実践活動を基盤とし，国及び地方公共団体がこれに積極的な協力をすることにより，蚊とはえの駆除を徹底して明朗で快適な生活環境をつくり上げ，あまねく国民の健康生活の確立に資する」ことを趣旨とし，「昭和三十年度から開始し，昭和三十二年度内までには，全国にあまねく普及することを目標」に掲げていた[(4)]。その担い手として，町内会や自治会などの地域住民組織に加え，「都市，特に住宅地区等については，その性格にかんがみ，地域婦人団体等特に婦人の積極的活動」が期待されていた[(5)]。その後，「蚊とはえのいない生活実践運動」は各地で広範に展開し，1950 年代末にかけて最盛期を迎えることになる[(6)]。

戦後日本の「蚊とはえのいない生活実践運動」に関する研究は，公衆衛生学[(7)]や民俗学[(8)]，文化資源学[(9)]などの分野で近年進展がみられる。また，「蚊とはえのいない生活実践運動」を直接の対象とした

---

(1)　新生活運動については，大門正克編著『新生活運動と日本の戦後――敗戦から 1970 年代』（日本経済評論社，2012 年）を参照。

(2)　以下の「蚊とはえのいない生活実践運動」に関する概要は，特に断らない限り，関なおみ「戦後日本の「蚊とハエのいない生活実践運動」――住民参加と国際協力の視点から」（『国際保健医療』24–1，2009 年）を参照。

(3)　1954 年 8 月末の時点で，モデル地区として約 3,500 ヶ所，約 800 万人が対象となっていた（橋本正巳「蚊と蝿のいない生活」（『体育の科学』5–8，1955 年，p. 315）。

(4)　「「蚊とはえのいない生活」の実践運動に関する件」（厚生省発衛第 225 号），1955 年 6 月 20 日。

(5)　「「蚊とはえのいない生活」の実践運動に関する件」（厚生省発衛第 230 号），1955 年 6 月 24 日。

(6)　かかる背景として，前述の蚊・ハエを媒介とした感染症対策という点に加え，「蚊やハエは正に不潔と不衛生のシンボルであり，蚊やハエのいる日常生活は，とりも直さず不潔，不衛生，非文化的な生活」（橋本正巳「蚊とハエのいない都市の建設」『市政』4–8，1955 年，p. 64）という認識の共有があろう。

(7)　注(2)前掲論文。

(8)　山中健太「戦後南予における「蚊とハエのいない生活」の展開――喜多郡旧五十崎町から宇和島市石応へ」（『日常と文化』5，2018 年）。

ものではないが，新生活運動を扱う大門正克らの共同研究では，「前期の（新生活－引用者）運動が「ハエと蚊をなくす運動に代表されるような，住民の自主的，積極的な努力によって問題を解決」できるものだった」という評価が「蚊とはえのいない生活実践運動」に与えられている[10]。しかしながら，これらの研究においては，「蚊とはえのいない生活実践運動」に関する地域社会の動向が充分に明らかにされておらず，地域社会の視点から「蚊とはえのいない生活実践運動」を歴史的に位置付けることが求められよう。

かかる研究史の中で，神奈川県小田原地域を対象とした森武麿らの共同研究は，神奈川県小田原市第 28 区・旧十字町一丁目（現在の小田原市本町付近）の二八婦人会の活動を事例に，「蚊とはえのいない生活実践運動」を中心とした地域社会の環境衛生改善過程について分析している[11]。二八婦人会が 1950 年代に町内会（自治会）や市当局と協働しつつ，地域社会の環境衛生改善を主体的に展開した点を重視し，「女性たちのエネルギーが発揮された」運動として「蚊とはえのいない生活実践運動」を位置付けている。ここで扱われている二八婦人会の主な担い手は，「旧中間層，伝統的な有力商人層の主婦」（具体的には「商店街の主婦」）であったという[12]。したがって，ここで明らかにされたのは，「商店街の主婦」が「蚊とはえのいない生活実践運動」に代表される地域社会の環境衛生改善に発揮した「エネルギー」であって，女性の「エネルギー」一般ではない。しかしながら，「旧中間層」（商店主など）の主婦と，新中間層（サラリーマンなど）の主婦では，地域社会との関わり方のありようが異なるものと推察される[13]。換言すれば，地域社会で展開した「蚊とはえのいない生活実践運動」に関して，「近代家族」[14]における女性の動向を明らかにする必要がある。そこで本稿では，「近代家族」を主な家族形態とする地域社会を対象に，「蚊とはえのいない生活実践運動」を分析することを通じて，「近代家族」を前提とした女性の「エネルギー」なるものの歴史的性格を考察する。

本稿では，阪急電鉄が兵庫県武庫郡旧武庫村生津・西富松・東武庫・武庫庄（現在の尼崎市域）に建設した武庫之荘住宅地（地図）を事例に，「蚊とはえのいない生活実践運動」を展開した地域住民

---

(9) 澤田るい「戦後日本における「蚊とはえのいない生活」実践運動の展開――教育映画『百人の陽気な女房たち』の分析から」（『文化資源学』13，2015 年）。

(10) 注(1)前掲書，p. 89。

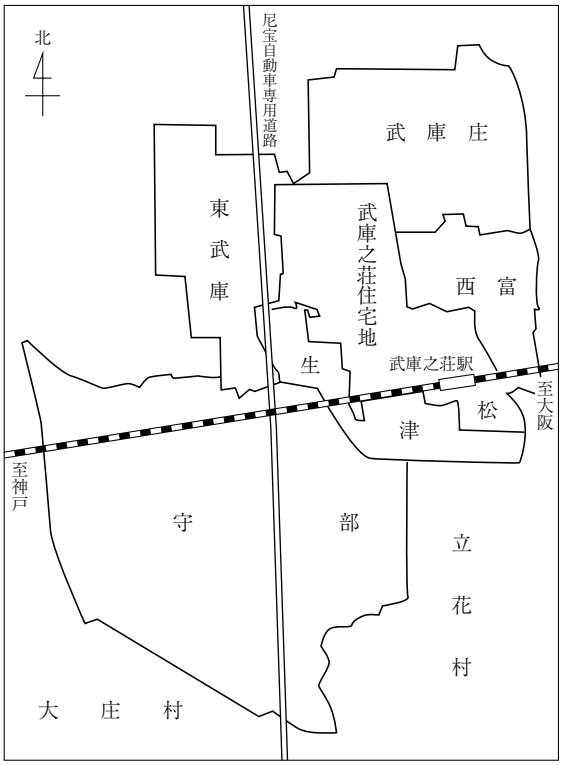
(11) 森武麿編著『1950 年代と地域社会――神奈川県小田原地域を対象として』現代史料出版，2009 年，第 3 章第 1 節，及び終章を参照。

(12) 注(11)前掲書，p. 363。

(13) 商店街と地域社会の関係については，満薗勇『商店街はいま必要なのか――「日本型流通」の近現代史』講談社現代新書，2015 年を参照。

(14) 日本の「近代家族」論の代表的な研究者の一人である落合恵美子は，「近代家族」の特徴として，①家内領域と公共領域との分離，②家族構成員間の強い情緒的絆，③子ども中心主義，④男は公共領域・女は家内領域という性別分業，⑤家族の集団性の強化，⑥社交の衰退とプライバシーの成立，⑦非親族の排除，⑧核家族の 8 項目をあげている（落合恵美子『近代家族とフェミニズム』勁草書房，1989 年）。日本の「近代家族」論をめぐる研究史に関しては，さしあたり沢山美果子『近代家族と子育て』吉川弘文館，2013 年を参照。

地図　武庫之荘住宅地周辺図



出典：大日本帝国市町村地図刊行会編『兵庫県武庫郡武庫村土地宝典』（1941年）より作成。

組織の活動を中心に検討する。なお，戦前の日本では，阪急電鉄に代表される鉄道会社が，「近代家族」から成る新中間層向けの郊外住宅地を積極的に開発していた[15]。阪急電鉄は，1930年代に入ると阪急神戸線沿線の郊外住宅地開発を精力的に展開し，本稿で対象とする武庫之荘住宅地の分譲を1937年10月より開始した（表）[16]。その際，阪急電鉄は，武庫之荘住宅地を「未だかつて見たことの無い大規模高級な理想住宅地」[17]として販売した。武庫之荘住宅地の分譲価格は当初1坪あたり25〜43円で，阪急神戸線沿線の中では西宮北口住宅地に次いで高い。また，「当武庫之荘地区は人口約五千人として全（尼崎−引用者）市の一％しか有りませんが，税金の面ではいわゆる高額所得者と称する年額収入二〇〇万円以上の人が全市七四〇人余りの内九十人も有り，市民税の対照（ママ）となる総

（15）その他の代表的な開発主体として，土地会社や土地区画整理組合がある。戦前日本における農村の市街地化に関しては，さしあたり高嶋修一『都市近郊の耕地整理と地域社会――東京・世田谷の郊外開発』日本経済評論社，2013年を参照。

（16）阪急電鉄による武庫之荘住宅地の開発過程については，出口雄大「一九三〇年代日本における農村の市街地化と土地問題――兵庫県武庫郡武庫村を事例に」（『史学雑誌』127–1，2018年）を参照。

（17）武庫之荘文化会編『武庫之荘文化会60周年記念誌』（2010年），p. 25。

表　阪急神戸線沿線の住宅地

住宅地	分譲開始時期	総坪数	売価（1坪）
稲野	1925年	22,000坪	18–20円
西宮北口	1931年	25,000坪	28–45円
塚口	1934年	24,000坪	16–23円
新伊丹	1935年	100,000坪	13–20円
園田	1936年	70,892坪	20–36円
武庫之荘	1937年	60,383坪	25–43円

出典：京阪神急行電鉄株式会社編『京阪神急行電鉄五十年史』(1959), pp. 120–125。
備考：1坪あたりの売価は，分譲開始時期の価格を示す。

収入額は三億五千万円以上にも達しております。これを二〇〇万円以下の収入者も加えますと相当多額のものになります[18]」という指摘を踏まえれば，武庫之荘住宅地における住民層の所得水準の高さは明らかであろう。それゆえ，武庫之荘住宅地の住民層は，所得水準の高い「近代家族」を主としていた[19]。しかしその一方で，武庫之荘住宅地では社会資本整備，環境・衛生整備に関する問題が生じ，阪急電鉄が武庫之荘住宅地を販売する際に打ち出したイメージとの乖離を生じさせた[20]。かかる地域社会の諸問題に対処することを目的として，武庫之荘住宅地の住民は武庫之荘文化会という地域住民組織を設立した。武庫之荘住宅地における地域住民組織の変遷は，以下の通りである[21]。武庫之荘文化会は，1938 年に防犯上の必要から住民が設立した荘和会を起源としている。荘和会は，1942 年 2 月の旧武庫村・尼崎市の合併を契機に，武庫之荘町内会へと改組された。武庫之荘町内会は 1947 年 5 月のポツダム政令第 15 号で解散したが，その翌月に住民は武庫之荘文化委員会を設立した。その背景には，武庫之荘住宅地における防犯上の必要に加え，新たに発生した上水道の断水という問題があった。1948 年の阪神上水道との接続を契機に，武庫之荘文化委員会を発展的に解消し，武庫之荘文化会が成立することになる。

以下では，武庫之荘住宅地における武庫之荘文化会を主体とした「蚊とはえのいない生活実践運動」の展開過程について明らかにする[22]。主たる史料として，武庫之荘文化会所蔵の『武庫之荘文化会報』を利用する[23]。

---

(18)「市長を囲んで懇談会開催について」(『武庫之荘文化会報』145，1962 年 10 月)。

(19)「武庫之荘住宅地に於て，その少数の商売人の方々を除いて，大半の方々がサラリーマンである関係上，毎日大阪や神戸へ出て行かれ，帰って来るのは寝る時だけと云う様な状態である」(「斎田事務局長を迎えて」『武庫之荘文化会報』142，1962 年 6 月）という指摘や，注(97)を合わせて参照。

(20) 武庫之荘住宅地の社会資本整備については，出口雄大「阪急武庫之荘住宅地の社会資本整備過程――1930～60 年代を中心に」(『社会経済史学』84–2，2018 年）を参照。

(21) 以下の叙述は，出口雄大「阪急武庫之荘住宅地における地域社会の形成――地域住民組織の視点から」(『日本歴史』847，2018 年）を参照。

1. 1950年代の武庫之荘住宅地における「蚊とはえのいない生活実践運動」

厚生省が1955年6月に作成した「『蚊とはえのいない生活』の実践運動に関する参考資料」では，「蚊，はえ駆除優良地区の事例」として，尼崎市が取り上げられている。その中で，「従来「蚊ヶ崎，泥ヶ崎」の別名の如く，低湿地で工場多く環境衛生甚だ不良，昭和二十六年来市当局の積極的な施策とモデル地区に重点をおいた全市的組織活動により，現在モデル地区においては極めて顕著な，その他の地区においても相当の成功を収めている[24]」という評価が与えられている。この点を踏まえると，1951年に尼崎市の環境衛生モデル地区に指定された武庫之荘住宅地では，「蚊とはえのいない生活実践運動」に関して，「極めて顕著な……成功を収め」たものと考えられよう。しかし実際には，武庫之荘住宅地における「蚊とはえのいない生活」の実現は容易でなかった。

以下では，武庫之荘住宅地での「蚊とはえのいない生活実践運動」を主導した武庫之荘文化会の活動について，1950年代を中心に検討する。その際，武庫之荘住宅地の地理的な条件が重要である。武庫之荘住宅地の周辺一帯は，尼崎市による大規模な土地区画整理事業が施行される1960年代まで農村的な性格が強かった[25]。かかる周辺農村の存在が，武庫之荘住宅地における蚊・ハエの発生に基底的な影響を及ぼしていた。この点に関しては，「私達（尼崎市当局－引用者）が最も頭を痛めていることは，武庫之荘地区の周辺には，（蚊の－引用者）膨大な発生源であるところの『水田』を如何にするかということです。この水田は個人の所有物であり，又農家にとって命の糧なのですから，この問題処理はそう簡単にはまいりません[26]」，「附近がすべて農家であると云う様な環境のために一匹もハエをなくするということはとても出来ない事であります[27]」などの指摘を踏まえれば，明らかであろう[28]。かかる周辺農村との関係の中で，武庫之荘住宅地では武庫之荘文化会を中心に，「蚊とはえのいない生活実践運動」が展開されることになる。

武庫之荘文化会では，1949年10月より「武庫之荘文化会々則」を施行し，主要な事業の一つ

（22）あらかじめ断っておけば，本稿では「蚊とはえのいない生活実践運動」に対する武庫之荘文化会の活動を中心に分析するが，以下の行論で示されるように，武庫之荘住宅地という地域社会の内部では「蚊とはえのいない生活」の実現の契機が見出せないことを通じて，かかる地域社会のありようについて論じることを目的としている。

（23）武庫之荘文化会が発行した『武庫之荘文化会報』に関して，武庫之荘文化会は「会と会員相互間の連絡機間（ママ）として現在会がやって居る事業とか計画，又町内の事情等を知って頂く唯一の機関」（富本憲明「会長に就任して」『武庫之荘文化会報』141，1962年5月）と位置付けている。『武庫之荘文化会報』は，武庫之荘文化会会員の各世帯に配布され，第1号（1949年11月）から第259号（1995年1月）まで刊行された。

（24）「『蚊とはえのいない生活』の実践運動に関する件参考資料」（1955年6月），p. 91。

（25）注(16)前掲論文。

（26）山本朗「「蚊・はえ」談義（その一）」（『武庫之荘文化会報』121，1960年7月）。筆者の山本は，当時尼崎市衛生局環境係長であった。

に武庫之荘住宅地の「衛生」の整備を掲げた。当時の武庫之荘住宅地では，「蚤や蚊や蝿のいない家が，台所が何軒あるでしようか，鼠の走らない家さへ少い[29]」という状態であったことから，蚊・ハエを媒介とした伝染病の発生が懸念されていた[30]。かかる状況の下で，武庫之荘文化会は 1951 年 6 月に衛生部を新設し，以降は衛生部を軸に「蚊とはえのいない生活実践運動」が展開された[31]。また同年には，尼崎市の環境衛生モデル地区に武庫之荘住宅地が指定された[32]。

武庫之荘住宅地における「蚊とはえのいない生活」の実現に向けて，武庫之荘文化会衛生部が 1950 年代中に展開した主な活動は，①各世帯に対する戸別収集用のゴミ箱設置の奨励，②武庫之荘住宅地内の薬剤散布・清掃などの尼崎市当局に対する要請であった。

①については，戸別収集用のゴミ箱を未設置の世帯による河川・空地への家庭ゴミの不法投棄が横行していた点に起因した[33]。特に厨芥（生ゴミ）がハエの主要な発生源の一つであったことから[34]，衛生部はハエの発生を抑制するために戸別収集用のゴミ箱の設置を各世帯に呼びかけた。かかる衛生部の喚起は一定の成果をあげ，1953 年度に武庫之荘住宅地で戸別収集用のゴミ箱を設置している世帯は，475（90.6%）に上った[35]。ただし衛生部では，「塵芥箱の内部が外部と完全に遮断されている状態」であった世帯が 399 にとどまった点を問題視し，以降は「蝿が這入ることの出来ない完全に

（27）「南一丁目隣保代表の集い」（『武庫之荘文化会報』121，1960 年 7 月）。「芦屋とか御影は草原や松林とかがあつても純農によつて住宅地がかこまれていると云うことがない。肥溜や堆肥になやまされるおそれがない。（略）農家と堺を接しているために環境衛生の徹底と云うことはなかなかむつかしい問題だと思う」（S 生「僕は映画が好きなのでよく観る」『武庫之荘文化会報』50，1953 年 12 月）という指摘も合わせて参照。

（28）かかる周辺農村の存在を基底とする環境・衛生問題の発生が，武庫之荘住宅地の住民（新住民）と周辺農村の住民（旧住民）間の緊張関係を顕在化させる一因となった。例えば，「四丁目の北はずれを東に折れて少し行くと，そこにうづ高く積まれた塵芥の山を見た。塵芥から放つ一種異様な臭気，それに無数の蝿が群がつていた。私は思はず顔をそむけて小走りに其処を過ぎたが，さらに北一丁目の端まで来ると同じく塵芥が山と積まれてあつた。（略）この塵芥は附近の農家の使用する堆肥として積んであるとの話だが，それにしてもこんな不潔な，非衛生的きわまるものを温存して置く理由はない。万一武庫之荘地域から伝染病が発生したらその責任は誰れが負うのだろうか，第一その附近の住宅の人々はたえず悪臭と蝿とに苦しめられ迷惑なことだろうと想像する。また武庫之荘の蝿があれ位薬品を撒布していても，まだ蝿が絶えないのは原因もそこにあるのではないだろうか」（「武庫之荘のゴミ」『武庫之荘文化会報』49，1953 年 11 月）という指摘を参照。

（29）永富「怪虫・蛔虫に気をつけましよう」（『武庫之荘文化会報』2，1949 年 12 月）。筆者の永富他人は，武庫之荘住宅地に永富医院を開業していた。

（30）「伝染病にかからぬやうに」（『武庫之荘文化会報』22，1951 年 8 月）。

（31）N 生「尼崎市と武庫之荘」（『武庫之荘文化会報』20，1951 年 6 月）。

（32）「文化会便り」（『武庫之荘文化会報』25，1951 年 11 月）。

（33）「ゴミ箱を調へて下さい」（『武庫之荘文化会報』2，1949 年 12 月）。

（34）例えば，「都市におけるハエの駆除と関連して根本問題になるのは清掃事業，すなわち汚物の収集，運搬，処分である。（略）この場合，ふん尿の汲取りもさることながら，特に重要なものはゴミの収集処分の問題である。都会におけるハエの大半はゴミ，特に厨芥から発生するといつても過言ではない」（注(6)前掲論文，p. 67）という指摘を参照。

外と遮断されたごみ箱を作って卵を生ませないようにしなければなりませ[36]ん」というように，戸別収集用のゴミ箱の「整備」を各世帯に呼びかけることになる。しかしながら，各世帯が戸別収集用のゴミ箱を設置・整備したからといって，武庫之荘住宅地におけるハエの撲滅が実現するわけではない。武庫之荘住宅地におけるハエの発生には周辺農村が基底的な影響を及ぼした点を既に述べたが，1955 年の時点で武庫之荘住宅地の周辺にハエの発生源となる野壺（肥溜）が 1,000 以上存在した[37]。また，ハエの発生源となる厨芥の放置を防ぐという点で家庭ゴミの収集の定期的な実施も重要であるが，当時の尼崎市による清掃事業が充分に機能していたとはいえない。この点に関しては，次節で詳述する。

②については，武庫之荘住宅地が尼崎市の環境衛生モデル地区に指定されたことで，尼崎市当局による薬剤の散布や側溝の清掃，道路の除草が積極的に実施された。例えば，1953 年度には，尼崎市当局から延べ 4,505 名が武庫之荘住宅地に派遣されるとともに，計 7 回の薬剤散布が実施された[38]。同年度に武庫之荘住宅地の各世帯を対象に実施された「蝿蚊駆除実態調査」を参照すると[39]，「昨年に比し蚊の発生状況」・「昨年に比し蝿の発生状況」という質問に対し，「殆んどおらない」：7.2%・6.1%，「減った」：59.3%・70.3%，「変らぬ」：21.6%・17.8%，「増えた」：7.8%・4.0%，「非常に多い」：4.0%・1.7%と回答していた。この調査結果を踏まえると，尼崎市当局の実施した薬剤の散布や側溝の清掃などが，武庫之荘住宅地における蚊・ハエの減少に一定程度の成果をあげたと考えられる。しかしながら，「効果があるが短期間である」と回答した世帯が 40.6%に上った点も見逃せない。この点は，武庫之荘住宅地では周辺農村に規定される形で蚊・ハエが発生しているがゆえに，その撲滅が困難であったことを示唆するであろう[40]。事実，「文化会はその会則にも謳つている様に衛生業務に最も重点を置くべきなのに，あにはからんや，市にのみ頼り過ぎてこれまで会の活動にはなんら見るべきものがないのであります。会発足以来十年の永きに亘つて衛生の点においては何等見るべ

（35）市衛生部調「武庫之荘地区衛生実態調査表」（『武庫之荘文化会報』53，1954 年 3 月）。戸別収集用のゴミ箱を設置していない世帯では，家庭ゴミの「焼却或は埋没」を行なっていた。

（36）「皆さんこんなことは」（『武庫之荘文化会報』101，1958 年 7 月）。

（37）文化会衛生部長「蚊について」（『武庫之荘文化会報』67，1955 年 5 月）。

（38）「昭和 28 年度武庫之荘衛生事業報告」（『武庫之荘文化会報』54，1954 年 4 月）。薬剤に関しては，BHC・DDT などが散布された。

（39）「蝿蚊駆除実態調査」（『武庫之荘文化会報』47，1953 年 9 月）。「蚊蝿駆除実態調査」は武庫之荘文化会が実施し，472 世帯が回答した。

（40）この点は，蚊・ハエの薬剤に対する耐性とも関係するだろう。例えば，「はえ，かの対策，郊外環境衛生でございますが，はえ，かが非常に多いということ，これはまあ薬のまき方が少ないんじゃないかとか，実際にそのダスティングが行なわれてないとかいうふうなご批判もあるようでございますが，実際はそのか，はえがそういう薬に対する耐久性が非常に強くなってきておると，で，終戦当時の D.D.T. のようにぱっと効力を出す薬がこのごろ出てこないということが薬をまいてもなかなか撲滅できないと，根絶できないという一つの大きな原因なんでございます」（『第 7 回尼崎市議会定例会会議録』2，1964 年 3 月 16 日，p. 45）という，当時の尼崎市衛生局長による答弁を参照。

き実績が挙つていない[41]」と，武庫之荘文化会衛生部長自らが総括せざるをえなかったことは，1950年代中に武庫之荘住宅地の「蚊とはえのいない生活」が実現に至らなかった点を端的に指し示している[42]。

かかる原因について，武庫之荘文化会衛生部では，「尼崎市の他の地区を見て御寛(ママ)なさい。どの地区においても婦人会が中心となつて蚊と蝿退治に着々と実績をあらわしているではありませんか。ただ武庫之荘だけが市にのみ頼り過ぎて市の都合主義に押されて文化会そのものの事業がお留守になつたと申しても過言でないと信じます。（略）当武庫之荘においては婦人会の結成すら実現できない現状においては一体どうしたらよいのか，当地区の衛生業務は一頓挫をきたしているのであります。今これを如何するかという時期に来ているのではないでしようか[43]」と指摘したように，武庫之荘住宅地の環境・衛生整備に対する尼崎市当局への依存と，それに対応する住民らの主体性の欠如という点に求めた。特に，武庫之荘住宅地における「婦人会」の未結成という状況を問題視していた。換言すれば，男性（夫）＝仕事・女性（妻）＝家庭という性別役割分業の家族形態から主に構成される武庫之荘住宅地において，蚊・ハエの発生などの住宅地内における環境・衛生問題は，女性を中心に取り組まれるべきものとして認識されたのである。

かかるジェンダー化された認識が武庫之荘文化会の役員ら全体に共有された契機として，武庫之荘文化会と尼崎市当局との間で1954年6月19日に開催された「地区衛生協力促進大会」がある。この席上で，尼崎市当局側から「今後，一定地域のみ特別作業（尼崎市当局によるモデル地区への重点的な薬剤散布－引用者）することは廃止される予定でありますから，今後の対策と致しましては，（略）武庫之荘におきましてもつと積極的に自主方針を樹てゝほしいと云うことです。即ち「地区衛生協力態勢」を作つてほしいと云うことです[44]」という発言があった。尼崎市では，1954年度の関連予算を大幅に削減せざるをえない状況ゆえに，蚊・ハエの発生という環境・衛生問題に対し，「地区衛生協力態勢」の構築による地域社会を主体とした対応を求めたのである[45]。かかる尼崎市当局の意向を受け，武庫之荘文化会側は「この衛生の仕事は皆様どなたにも大変御面倒なことなんですが，住みよい明るい住宅地にするために御協力願いたいと存じます。このことは日頃御家庭におられます御婦人方の御協力にまたねばならないと思うのであります。具体的には，各丁目毎に二名宛の婦人

（41）柏井林七「衛生部中間報告」（『武庫之荘文化会報』113，1959年9月）。

（42）「今年の夏はことのほか暑さも厳しくその期間も永(ママ)がかつたためか蝿も多く，衛生部(ママ)えの風当りも強かったようです。今年は衛生部の費用も昨年より倍以上の予算を取って，薬品の撒布などに多(ママ)いに努力した積りなのですが，充分な成績が挙らなかったのは，慚愧に堪えません」（矢部良策「会長よりのお知らせ」『武庫之荘文化会報』104，1958年10月）などの指摘も合わせて参照。

（43）注(41)前掲史料。

（44）「清潔な町を作りましょう　地区衛生協力促進大会の模様」（『武庫之荘文化会報』57，1954年7月）。

（45）尼崎市の1954年度における「そ族昆虫駆除費」の決算額は6,771,922円で，前年度比53.7%の減少であった（『尼崎市歳入歳出決算書』1952年度）。

衛生委員をお願い致しまして衛生対策，連絡等に御協力願いたいと存じます[46]」という方針を打ち出した。「近代家族」を主とする武庫之荘住宅地において，家内領域を担う女性らの「エネルギー」を「蚊とはえのいない生活実践運動」に代表される地域社会の環境・衛生整備に発揮せしめようと，武庫之荘文化会は企図した。しかしながら，「今年の夏季対策を始める前，協力体制つまり衛生部の下部組織をこしらえようと努力したのですが，これは成功しませんでした[47]」とあるように，武庫之荘住宅地における女性を主体とした「地区衛生協力態勢」構築の試みは失敗に帰したのである。その後もかかる試みが度々実施されたが，いずれも充分な成果をあげることはなかった[48]。主に「近代家族」から成る武庫之荘住宅地では各世帯の独立性が高く，家内領域を担う女性らの多くが家事・育児（教育）などを優先させる中で，かかる組織化が困難であったものと考えられる[49]。

しかしながら，1950 年代の武庫之荘住宅地における「蚊とはえのいない生活実践運動」のかかる帰結の原因を，「近代家族」の下で家内領域を担う女性らの環境・衛生整備に対する主体性の欠如という点のみに求めることはできない。既述のように，武庫之荘住宅地における蚊・ハエの発生に際しては周辺農村が基底的な影響を及ぼしていた点に加え，当時は尼崎市営による家庭ゴミの収集も円滑に実施されていなかった。また，1950～60 年代における武庫之荘文化会では，役員がほぼ男性のみで構成されていた点も重要であろう[50]。地域住民組織におけるジェンダー間の権力的非対称性を前提として，家内領域を担う女性らが武庫之荘住宅地内の環境・衛生整備に取り組むべきというジェンダー化された認識を彼らが共有したこと自体，かかる問題に対する男性の関心の低さを指し示していた。以上の点から，武庫之荘住宅地では 1950 年代中に「蚊とはえのいない生活」の実現には至らなかったのである。

2. 1960 年代の武庫之荘住宅地における「蚊とはえのいない生活実践運動」

1960 年代に入ると，武庫之荘住宅地の「蚊とはえのいない生活実践運動」は新たな段階を迎える。本節では，1960 年代の武庫之荘文化会が主に展開した環境・衛生整備に関する活動――(1)民間業者委託による家庭ゴミ収集の実施，(2)婦人部の結成，(3)内水氾濫の深刻化――について，「蚊とは

---

(46) 注(44)前掲史料。

(47) 衛生部長　米田右一「夏季衛生対策を終りて」(『武庫之荘文化会報』59，1954 年 9 月)。

(48) 例えば，「当地区は従来衛生モデル地区に指定され，文化会衛生部により推進しておりましたが，地区組織活動や共同作業等においては非常に不成績な状態にて，遺憾な点が御座いました」(「蝿と蚊のいない生活推進協議会」『武庫之荘文化会報』95，1958 年 2 月）という指摘を参照。

(49) この点に関しては，「この武庫之荘という地域社会について少し考えてみたい。先日も，北川会長から文化会活動に対し，荘人一般の関心が薄いことを指摘されたが，(略）これは要するに，荘人各家が比較的恵まれ，人と煩わしい接衝(ママ)を持たなくても，大方の問題の解決が出来るからではなかろうか」(四丁目　奥村清子「年頭所感」『武庫之荘文化会報』116，1960 年 1 月）という指摘も合わせて参照。

(50)『武庫之荘文化会報』掲載の各年度における役員名簿を参照。

えのいない生活実践運動」と関連させる形で検討する。

(1) 民間業者委託による家庭ゴミ収集の実施

武庫之荘住宅地を含む旧武庫村では各部落や衛生組合が家庭ゴミの収集を実施していたが，1942年2月の尼崎市との合併を契機に，尼崎市営による家庭ゴミの収集・運搬・処分が1942年度より実施されることになった[51]。武庫之荘住宅地は「3日目毎に収集する場所」に指定されたもの[52]の，実際には1週間に1度の収集にとどまっていた[53]。武庫之荘文化会では，かかる家庭ゴミの収集状況を改善するよう尼崎市当局に陳情を行なっていたが，1950年代中に改善が図られることはなかった。また，「ゴミ取りの回収がせめて五日に一度，きまって来てくれたらと思っております。来て下さる時には三日目ぐらいに取ってくれますが，もお[ママ]次にはさっきもおっしやいました様に十五日も二十日も取りに来られないという状況で困っております[54]」という住民の声を踏まえれば，武庫之荘住宅地における家庭ゴミの収集状況が，1960年前後により一層悪化したと考えられる。家庭ゴミに含まれる厨芥がハエの主な発生源の一つであったことから，かかる事態は「蚊とはえのいない生活」の実現に障壁とならざるをえなかった。

かかる状況を受け，武庫之荘文化会は，当時尼崎市会議員であった米田右一（武庫之荘住宅地在住）[55]に尼崎市当局への働きかけを要請した。しかし米田は，「いまの機能では週一，二回来てもらうと云うことはとても出来ない相談です[56]」，「私も出来るだけの事はやりますが，なんでもかんでも市におぶさって行くのもどうかと思います[57]」と回答し，当時の尼崎市議会で議論されていた民間業者委託による家庭ゴミの収集という案を提示した。かかる米田の提案を受け，武庫之荘文化会は，1960年7月より武庫之荘住宅地内の家庭ゴミ収集を摂津清掃株式会社に委託することを決定した[58]。それ

---

(51) 尼崎市の清掃事業史発刊委員会編『尼崎市の清掃事業史』(尼崎市環境事業局，1988年)，pp. 27, 33。

(52) 注(51)前掲書，pp. 43–44。

(53) 「文化会月報」(『武庫之荘文化会報』32，1952年6月)。この他にも，「文化会の手で一日も早く，どんなゴミを箱へ入れても持つて帰つてくれる清掃人と取替へる様市役所へお願ひ下さい」(武庫之荘一住人「清掃人の交替を願ふ」『武庫之荘文化会報』16，1951年2月）などの問題が生じていた。この点に関しては，「日中は男が仕事で外出してゐるものですから女ばかりと見てこのゴミ取男難題を吹きかけておそれさせてゐると聞きます」とあるように，ジェンダー間の権力的な非対称性が起因していた。

(54) 「南一丁目隣保代表の集い」(『武庫之荘文化会報』121，1960年7月)。

(55) 米田右一は，1917年生まれで，兵庫県川辺郡旧立花村東富松の出身であった。武庫之荘住宅地にて「ヨネダ理容室」を経営する一方で，武庫之荘文化会衛生部の部長を1953～58年度に務めた。1959年4月の尼崎市議会議員選挙に立候補し，初当選した。その後も武庫之荘住宅地を選挙地盤として尼崎市会議員を長らく務め，1972年度には尼崎市議会議長に就任した。以上は，「荘人歴訪」(『武庫之荘文化会報』75，1956年1月）などを参照。なお米田は，尼崎市会議員に当選後も武庫之荘文化会の定例役員会にオブザーバーとして積極的に出席するだけでなく，1965年度，1971～1984年度には武庫之荘文化会長を務めた。

(56) 「市会議員米田右一氏訪問記」(『武庫之荘文化会報』120，1960年6月)。

(57) 注(54)前掲史料。

に伴い，武庫之荘文化会は，各世帯から「厨芥処理費」（1 世帯あたり月額 30 円）を徴収するとともに，尼崎市から補助金（1 世帯あたり月額 30 円）の交付を受けた[59]。以上の経過を踏まえると，武庫之荘住宅地における民間業者委託の家庭ゴミ収集という方式の導入にあたっては，武庫之荘住宅地を選挙地盤とする尼崎市会議員の米田右一に助言を受けつつ，武庫之荘文化会の決定が尼崎市当局に反映された点がうかがわれる[60]。なお，家庭ゴミの収集から搬出に至る過程に関しては，委託業者の摂津清掃株式会社と契約する「オジサン」（作業員）が武庫之荘住宅地の各世帯の家庭ゴミを月曜日～土曜日に収集した後，摂津清掃株式会社が尼崎市営の焼却場まで搬出を行なっていた[61]。

武庫之荘住宅地において，民間業者委託による家庭ゴミの収集を実施した際，以下の問題が生じた。第一に，1961 年 4 月より発生した作業員の給与に関する問題である[62]。この点は，武庫之荘住宅地の各世帯に対する家庭ゴミの収集を担う作業員が，月給の値上げを摂津清掃株式会社へ要求したことに端を発した。作業員は従来 17,000 円であった月給を 25,000 円に値上げするよう求めたのに対し，摂津清掃株式会社は 22,000 円の値上げを回答するにとどまった。両者の交渉が決裂したため，作業員は摂津清掃株式会社を退職した。しかし，摂津清掃株式会社は代替の作業員を補充することができず，武庫之荘住宅地の家庭ゴミがその間に放置され続けたため，武庫之荘文化会に対する非難の声が住民から上がった。最終的には，武庫之荘文化会が 1961 年 7 月に作業員・摂津清掃株式会社と直接に契約し，作業員に月給として 25,000 円，摂津清掃株式会社に家庭ゴミの搬出に要する経費として 27,000 円の計 52,000 円を月々支払うこととなった。以前は武庫之荘文化会が摂津清掃株式会社に 49,000 円（作業員の月給を含む）を一括して月々支払っていたが，従来に比して合計で 3,000 円程度の増額となったため，武庫之荘文化会は各世帯から徴収する「厨芥処理費」の値上げ（1 世帯あたり月額 40 円）を決定した。かかる「厨芥処理費」の値上げに際して，当時の会長は，「この十円値上に対して反対する方々もあるかと思われますが，（略）今日，自主的に厨芥処理を実施している地区に於きまして三十円という様な安い負担で厨芥処理を実施している処は武庫之荘を除いて，他のどの地区でも見あたらないのでありまして，（略）この十円の値上が不当であると云う様にお考えの方は，一度，自分がゴミを集めるオジサンの立場に立って考えてほしい。鼻をつく悪

（58）民間業者委託による家庭ゴミの収集が武庫之荘住宅地で実施された間は，各部費の中で衛生部費の比率が最も高い傾向にあった（出口雄大「武庫之荘文化会の収支決算――一九七〇年代以降を中心に」『地域史研究』119，2019 年，p. 80）。

（59）「お願い」（『武庫之荘文化会報』122，1960 年 8 月）など。

（60）武庫之荘住宅地の社会資本整備に際しては，武庫之荘文化会と尼崎市当局を取り結ぶにあたって，武庫之荘住宅地在住の兵庫県会議員や尼崎市会議員らがより重要な役割を果たしていた。この点に関しては，注(20)前掲論文を参照。

（61）H「厨芥処理費を十円値上して四十円とします」（『武庫之荘文化会報』134，1961 年 8 月）。

（62）以下の叙述は，特に断らない限り，会長　藤岡京一「厨芥処理について」（『武庫之荘文化会報』131，1961 年 5 月），「第 5 回役員会報告」（『武庫之荘文化会報』134，1961 年 8 月），注(61)前掲史料を参照。

臭が体全体にしみ込み，この炎天の中を八百戸近い家に一つ一つゴミ缶を集めて歩くことは想像をこえる苦労であることを，充分にご認識願いたいと思います」と説明し，武庫之荘住宅地の住民らに理解を求めた。月額10円の値上げに不満をもつ世帯も存在したことがうかがわれるが[63]，所得水準の高い住民層から成る武庫之荘住宅地では，かかる負担増よりもむしろ「はえのいない生活」の実現という点を重視し，最終的に合意形成が図られたものと考えられる。以上を踏まえると，民間業者委託による家庭ゴミの収集という方式は，作業員の流動性という点で必ずしも安定的なものではなかった。

第二に，家庭ゴミの収集対象に関する問題である。民間業者委託による家庭ゴミの収集は，当初「厨芥処理費」を負担する武庫之荘文化会の加入世帯のみを対象としていた。しかし実際には，「文化会に入会しないでゴミだけ取ってくれと云う様な人もある[64]」という状況が生じていた。武庫之荘文化会に未加入の世帯は「厨芥処理費」を負担していない以上，本来であれば民間業者委託による家庭ゴミの収集というサービスを享受することができない。とはいえ，未加入の世帯で発生した家庭ゴミ（特に厨芥）を収集せずに放置すれば，武庫之荘住宅地の環境・衛生整備に支障をきたさざるをえない。それゆえに，武庫之荘文化会では「市の清掃課の方から来てくれない現在，取らなければしかたがないと思います[65]」という結論に至ったのである。かかる事態は，武庫之荘文化会の加入世帯・未加入世帯間における受益・負担関係の矛盾という問題を惹起せざるをえない。その後の経過は不明であるが，1963年6月の塵芥車の導入を契機として，「文化会印のある木札の付いたカンのある御宅のみ取らして貰うこと[66]」を決定し，各世帯の家庭ゴミの収集を隔日で実施することになった。1969年6月より尼崎市が週3回の定時収集を実施することに伴って，武庫之荘住宅地の民間業者委託による家庭ゴミの収集という方式は廃止された[67]。換言すれば，武庫之荘文化会に加入しているか否かにかかわらず，武庫之荘住宅地の各世帯は家庭ゴミ収集のサービスを享受することが可能となったのである。

(2) 婦人部の結成

既に述べたように，主に男性から構成される武庫之荘文化会の役員らは，武庫之荘住宅地の環境・衛生整備を女性が担うべきというジェンダー化された認識を共有していた。かかる認識の下で，1960

---

(63) 事実，月額10円の値上げを決定した役員会において，一部の役員は「一丁目はなかくうるさい処で，私は心配しております。ご趣旨のP・Rには勉めますが……」（「第5回役員会報告」『武庫之荘文化会報』134，1961年8月）という懸念を示していた。

(64)「第九回役員会報告」（『武庫之荘文化会報』127，1961年1月）。

(65) 注(64)前掲史料。

(66)「街灯と厨芥処理について皆様へお願い」（『武庫之荘文化会報』152，1963年6月）。

(67) 注(51)前掲書，p. 83，文化会会長　鴻池勝治「文化会事業の概要」（『武庫之荘文化会報』201，1969年11月）。

年代に入ると，武庫之荘文化会内に婦人部を結成しようとする動きが本格化した。以下では，武庫之荘文化会における婦人部の設立過程を追う。

武庫之荘文化会では，1951 年度に初めて婦人部が結成された[68]。1954 年度には武庫之荘文化会の機構改組に伴って，婦人部は教養部に編入されるとともに，新たに婦人会が設置された[69]。しかしながら，武庫之荘住宅地において，婦人部（婦人会）が定着することはなかった[70]。その理由として，従来の婦人部の活動は「活動形式が，主として，趣味と云うかレクリエーションと云うか，専ら，娯楽と親睦の集まりであった」という点に加え，「ほかの地区でありますと，小学校の育友会を中心として，お母様方の結び附きというものがありますが，この武庫之荘に於ては，学校がばらくでそういう結び付きがありません」という点があげられている[71]。前者の点については，「親睦」を主な目的とする婦人部の活動が，武庫之荘住宅地の婦人らの興味を惹くものではなかったことを指し示している。また後者の点については，主に「近代家族」から成る武庫之荘住宅地では，子弟の教育に対する関心が高く，他地区の公立・私立小学校への就学が一般的であったがゆえに[72]，学区の PTA を軸とした婦人の組織化が困難であったことを示している。

かかる婦人部に関する経緯を前提としつつも，1960 年 9 月に開催された武庫之荘文化会の定例役員会において，婦人部の再結成が決定されることになる[73]。すなわち，ある役員が「武庫之荘に婦人部と申しますか婦人会と申しますか婦人の組織がないと云うことは大変残念なばかりでなく，ほかの地区はみんな御婦人が出ているのに武庫之荘だけが男が出ていると云うのでは困ると思うのです。（略）これは敬老会だけの問題じゃなしに衛生のことにしても子供さんの学校のことにしても住宅地のいろくなことは毎日外に出ている御主人より御婦人方に関係があるわけですが。会長！ この際，是非，婦人部を作るべきだと思いますね」と発言し，婦人部の再結成を提案した。かかる提案に対し，「併し，いまここで婦人部を作るにあたって，たゞ作ったらよいと云うのじゃなしに，何故これまで婦人会が出来なかったか，出来てもすぐに立消えになるのはどうしてか，その点に就て自己批判と云うか反省してみる必要があるんじゃないか」という意見が上がった。これは，武庫之荘文化会の婦人部に関する経緯を踏まえた発言であった。しかしながら，この点に関しては充分に議論されず，「いま文化会でやっている活動のことごとくが，例えば，厨芥処理にしても蚊とハエの撲滅ということにしても，広く環境衛生の問題は勿論のこと，そのすべてが，毎日外に出て行く亭主よりも御婦人に直結する問題だと思うのです。（略）とにかく，婦人部は是非とも必要でありまして今年

（68）一婦人「婦人部の誕生を祝して」（『武庫之荘文化会報』20，1951 年 6 月）。
（69）「文化会の新しい機構」（『武庫之荘文化会報』55，1954 年 5 月）。
（70）「武庫之荘に……婦人会を」（『武庫之荘文化会報』101，1958 年 7 月）。
（71）「婦人部主催　新春懇談会」（『武庫之荘文化会報』138，1962 年 1 月）。
（72）注(20)前掲論文。
（73）「第 6 回役員会報告」（『武庫之荘文化会報』124，1960 年 10 月）。

はすでに四ケ月すぎましたが，まだおそくはないと思います。これからでもよいから，この際しっかりとした組織を作れば軌道に乗るわけです」と当時の会長が発言し，武庫之荘文化会として婦人部の再結成を決定した。

以上のように，主に男性から成る武庫之荘文化会の役員が主導する形で，婦人部が再始動することになる。かかる婦人部の再結成については，「武庫之荘に住む方々の大部分は，その生活の糧を得るために，大阪や神戸に行って，帰って来るのは夜になってからである。謂うならば，武庫之荘はベッド(ママ)・タウンである。大部分のご主人は，たゞ寝るときだけ武庫之荘に帰って来るわけで，町内のいろくな問題に詳しい筈がない。ご婦人の場合には事情が違って，殆んど家庭におられるために，街の環境，家庭の環境に詳しいわけであるから，今後，文化会の運営に於て，単に，婦人部という脇役でなしに，文化会運営のイニシヤチーフ(ママ)を婦人部の方々によってやって頂きたい。この希望は，単に一部の人々の考えではなしに，武庫之荘に住む人々の大部分の心からの願いであると思います(74)」という展望と対応関係にあった。「近代家族」という形態において，家内領域を担う女性が地域社会に最も近い存在であるがゆえに，今後は女性を中心とした武庫之荘文化会の運営が期待されたのである(75)。再結成後の婦人部についての本格的な考察は本稿の課題を越えるが，当初は新設の尼崎市立武庫東小学校に関する活動を主に展開したのに対し(76)，その後はバザーや各種講習会などの実施を活動の中心に据え，親睦的な性格を強めることになる。しかしながら，既述の「地区衛生協力態勢」の場合と同様に，「近代家族」という形態の下で婦人部への主体的な参加を女性らに求めることは困難であった(77)。

(3) 内水氾濫の深刻化

本節の(1)では，民間業者委託による家庭ゴミの収集という方式が武庫之荘住宅地で実施に至る過程について検討した。かかる方式は，武庫之荘住宅地の「蚊とはえのいない生活」の実現に貢献したのであろうか。この点に関して，「長年悩まされたハエも毎日のゴミ回収のため非常に少なくなって本当に気持よい日々を送らして頂きます。お住いの皆様方も御同様の事と存じます(78)」という一主

---

(74) 注(71)前掲史料。

(75) 事実，1960 年 11 月の役員会で婦人部の役員を選出した際に，「近い将来におきまして，武庫之荘の文化会は全部御婦人によって運営していただく様に成長発展」させることを目的として，それぞれ武庫之荘文化会の担当部門を設定した（「第八回役員会報告」『武庫之荘文化会報』126，1960 年 12 月）。

(76)「文化会婦人部は昨年九月に発足しまして以来，学校新設計画に側面的に協力して参りましたが，(略)別個の機関が改めて学校新設を計ることになりましたので，婦人部でも三十六年度は改めて婦人部のあり方といったものを考えねばならない状況にありました」（中馬英子「文化会婦人部事業計画」『武庫之荘文化会報』130，1961 年 4 月）。

(77) 時期は下るが，「育児やら御子様方の御教育に熱中していらっしゃる方々，その他の事でお忙しい方々が時間をさいてまで御参加下さる程魅力のある企画を，才覚も力もない私共はとうく考えつきませんでした」（「退任のごあいさつ（婦人部）」『武庫之荘文化会報』227，1978 年 5 月）を参照。

婦の発言や，「ハエをなくするため，厨芥処理について一昨年溝口会長時代に実施し引続いて行なっています。（略）毎日取りを行なうことが大いに効果を現わしています。来年度は蚊をなくすることでありま[(79)]す」という米田の発言などを踏まえると，武庫之荘文化会が主導した民間業者委託による家庭ゴミの収集という方式が，武庫之荘住宅地におけるハエの減少に一定の成果を挙げたと考えられる。その一方で，「近ごろのハエや蚊の多いことはなんとかならないでしょうか。阪神間は蚊帳をつらない町が多いというのに，武庫之荘がこれではモデル文化住宅というのは恥ずかしいと思いま[(80)]す」などの住民による指摘は，武庫之荘住宅地で依然として蚊・ハエが発生していた点を指し示している。武庫之荘住宅地における「蚊とはえのいない生活」の実現には，蚊・ハエの主たる発生源である周辺農村の全面的な市街地化を待たねばならなかった。以下では，武庫之荘住宅地の周辺農村が全面的な市街地化に至る過程を追う。

1960 年代に入ると，尼崎市は，住宅難の解消を目的として大規模な土地区画整理事業を次々と施行した。武庫之荘住宅地の周辺農村を対象としたものでは，東武庫・西武庫・常吉など 63.7 ha を対象とした尼崎都市計画武庫土地区画整理事業（1960–1967），生津・西富松・守部など 151.1 ha を対象とした阪神間都市計画武庫之荘南部土地区画整理事業（1962–1978），生津・東武庫・西武庫・守部など 54.9 ha を対象とした阪神間都市計画武庫第二土地区画整理事業（1965–1978）がある[(81)]。以上の土地区画整理事業を通じて，武庫之荘住宅地の周辺農村は全面的な市街地化に至った。しかしながら，周辺農村の全面的な市街地化が進行する過程において，武庫之荘住宅地では，内水氾濫という新たな環境・衛生問題が深刻化した。内水氾濫が蚊・ハエの発生の一因となった点を踏まえる[(82)]と，武庫之荘住宅地の「蚊とはえのいない生活」を実現するには，内水氾濫の解消が求められた。

武庫之荘文化会では，1961 年 7 月 10 日開催の定例役員会から武庫之荘住宅地の内水氾濫への対策を本格的に議論し始め[(83)]た。当時の会長が「過日の大雨で武庫之荘全体が水びたしになりまして，実は，驚ろ[ママ]いているわけです。こんな事は今度がはじめてじやないでせうか」と発言したのに対し，オブザーバーとして参加した米田は「正直のところ，市当局としても，対策の樹て様がないのじゃないかと思います。（略）大同阪急住宅から北の方をご覧になると水田が一面にありますが，その水

（78）「ハエがなくなってよろこんでいます」（『武庫之荘文化会報』124，1960 年 10 月）。「皆様の御尽力によりまして厨芥処理は軌道に乗りましたのでハエが大変少なくなったことは洵によろこばしいことだと存じます」（「第壱回役員会報告」『武庫之荘文化会報』130，1961 年 4 月）という指摘も合わせて参照。

（79）注(18)前掲史料。

（80）K・K 生「ハエや蚊のいない武庫之荘に」（『武庫之荘文化会報』163，1964 年 7 月）。

（81）尼崎市都市開発局区画整理部区画整理課編『区画整理の歩み――土地区画整理法施行 25 周年記念』（1981 年），p. 5。なお，尼崎都市計画武庫土地区画整理事業の施行は，日本住宅公団による西武庫団地の造成と対応するものであった。

（82）例えば，尼崎市では内水氾濫に伴う浸水が発生した際に被災地域への薬剤散布が実施されている。

（83）「第 4 回役員会報告」（『武庫之荘文化会報』133，1961 年 7 月）。

田の殆んどが近々のうちに宅地に変って地あげされるわけですが，いまゝで水田に溜っていた水が低い処へと流れる結果，先日の様な大雨が降りますと，たちまち川から水があふれ出て，道路が川の様になって，一面の水びたしになるわけです。いま盛んに行なはれている宅地造成ですが，これが野放しの状態ですから，三〇〇ミリとか五〇〇ミリの雨が降りますとこの武庫之荘は今後ますくひどくなるのじゃないかと思います。対策としては取敢えず西富松排水路の第一期工事が漸く終りましたし，近く実施される阪急線以南の都市計画事業が完成しますと排水路も完備して，いまよりずっと良くなると思います。が，さしあたって目下，区画整理事業施行中でありますから，関係者以来(ママ)はどおう(ママ)することも出来ないわけです」と説明した。以上を踏まえると，武庫之荘住宅地の内水氾濫に伴う床下浸水の発生に関しては，周辺農村の急激な市街地化の進行と排水路の未整備という点が主な原因であった(84)。しかしながら，その解消には武庫之荘南部土地区画整理事業の施行による十全な排水路の整備を待たねばならず，かかる事業の完了に至るまで，武庫之荘住宅地の住民は内水氾濫の発生に対する不安を抱えつつ生活せざるをえなかった(85)。事実，1961 年度に限っても，上記の他に 6 月 26 日，第二室戸台風などの際に，内水氾濫に伴う床下浸水が武庫之荘住宅地を襲った(86)。

尼崎市では，「本市の宿命である水害対策(87)」として，1953 年度より公共下水道の建設を開始した。しかし実際には，尼崎市の財政的な制約から公共下水道の建設は遅々として進捗せず，多くの地域では排水路の設置によって対応せざるをえなかった(88)。武庫之荘住宅地との関連では，約 236 万円の予算で西富松排水路の新設改良工事を 1961 年 5 月より開始したが(89)，その最中に武庫之荘住宅地で内水氾濫に伴う床下浸水が生じた点は既に述べた通りである。上記の工事は 1961 年 7 月末に完了したが，その後も数次にわたって西富松排水路の改良工事が実施されることになる(90)。とはいえ，尼崎市が武庫之荘住宅地に対する内水氾濫の発生に積極的な対策を講じたわけではなかった。この点

---

(84) その他の原因として，武庫之荘住宅地周辺における交通量の増加に伴う排水管の損傷や河川への家庭ゴミの不法投棄，樋門の管理に関する問題などがある（「建設局との懇談会」（『武庫之荘文化会報』175，1965 年 7 月など）。なお，内水氾濫の発生時における樋門の管理をめぐる問題については，沼尻晃伸『村落からみた市街地形成――人と土地・水の関係史　尼崎 1925～73 年』（日本経済評論社，2015 年）を参照。

(85) 1961 年 6 月 19 日に尼崎市当局と懇談会を開催した際も，武庫之荘住宅地における内水氾濫の発生に関して，尼崎市建設局河港課長が「昨今の異常豪雨に対しては正直のところ，手のうちようがないわけです。近時，宅地造成によりまして，いま迄，農地に溜っていた水が河川に集中して，たちまち川からあふれ出た水は附近一帯を水浸しにしてしまう。河川対策は庄下川の完成と西富松排水路及び南部の区画整理による排水路計画の着工をまたなければ，水害からまぬがれる事は出来ない」（「尼崎市建設局長一行を迎えて――道路の全面舗装と下水道の完備を要望する」『武庫之荘文化会報』133，1961 年 7 月）と説明していた。

(86)「第七回役員会報告」（『武庫之荘文化会報』136，1961 年 10 月）など。

(87)『第十三回尼崎市議会定例会会議録』1，1961 年 3 月 11 日，p. 11。

(88)『月刊あまがさき』3–5（1966 年），pp. 2–5。なお尼崎市は，1956 年度より地方財政再建促進特別措置法の適用を受けていた。

(89)『尼崎市議会報』号外 6（1961 年），p. 9。

を考える上で，「市に対して水害対策をいろくと具申しておりますが，なにぶん，南部の浜側では，ここよりも，ずっと低い処が沢山ありまして，床下浸水の程度では，とてもじゃない，補助金を出してまで応急対策はやってくれないのじゃないかと思います，順番を待っておりますと大分先のことになると思います。現在，床上浸水で困っている処が沢山あるのに，武庫之荘の実情をいくら説明しましても，早急な実現が困難じゃないかと思います[91]」という米田の発言が重要である。すなわち，尼崎市の財政的な制約の下で，工業地域の尼崎市南部で床上浸水の被害が生じている状況においては，武庫之荘住宅地への対策が優先的に講じられる可能性は極めて低かった。そこで米田は，「併し，地元で排水路の建設資金の一千万円を立替払いすると云うことであれば，それは問題は別だろうと思います。建設当局と致しましても，充分に，考慮するだろうと思います」という代替案を武庫之荘文化会に提示したが，かかる負担を住民に強いることは困難であった。

こうした中で，西富松排水路の整備が完了に至るまでに内水氾濫が生じた際には，武庫之荘住宅地の 60％程度がその被害を受けることが想定された[92]。しかし結局のところ，「会としては皆さんに注意を喚起するしか手の打ちようがない[93]」と言明せざるをえなかったように，武庫之荘文化会による内水氾濫への対策は限られていた。その後も武庫之荘住宅地では内水氾濫に伴う被害が継続的に発生し，例えば 1965 年 5 月には「未曾有の出水」に見舞われるとともに[94]，66～67 年にも床下浸水が生じた[95]。1960 年代後半に至るまで住民らは内水氾濫の発生に対する懸念を抱えながら生活せざるをえなかった。

武庫之荘住宅地における内水氾濫の発生という問題が解決に至るのは，「浸水対策に係る水路整備については，四三年度に国鉄古小路ガード下浜田川排水路のショートカットが竣工し，四十一年度から着手した阪急神戸線以北の，西富松排水路の改良工事が四十四年度末をもって完工する予定です。武庫之荘駅北側の排水管布設により，この地域の永年の浸水は解消されましたが，更に武庫之荘地区の排水対策の推進を図りたく思います[96]」とあるように，尼崎市施行による周辺農村の土地区

---

(90) 例えば，西富松排水路の改良工事に関する費用として，1962 年度に約 668 万円，1963 年度には約 1,920 万円が決算された（『尼崎市歳入歳出決算書』1962 年度，1963 年度）。

(91) 注(86)前掲史料。

(92)「台風シーズンを迎えての浸水対策について」（『武庫之荘文化会報』143，1962 年 7 月）。

(93)「五月中の行事報告」（『武庫之荘文化会報』152，1963 年 6 月）。

(94) 注(84)前掲史料。

(95)『月刊あまがさき』4–8（1967 年），pp. 2–4 など。

(96) 市議　米田「市政報告」（『武庫之荘文化会報』200，1969 年 8 月）。「当地に住みつき二十年二昔，上流の田畑や池が次々と宅地化するに比例して，溢れる水嵩が増加する。文化に追尾する人災であることを嘆き乍ら。古く阪急住宅として発祥以来の二百五十耗下水管が，西の生津用水路に流出されていたのを，図の如く三〇〇，四〇〇，六〇〇耗の大口径に流出口を東の用水路へ布設がえしたお蔭で，今年は不順続きの大雨があったにもかかわらず溢水を免れる」（吉田「やはり人災だった」『武庫之荘文化会報』200，1969 年 8 月）という指摘も合わせて参照。

画整理事業が一定程度進捗し，十全な排水施設の整備が完了する 1970 年前後を待たねばならなかった。これを以て，武庫之荘住宅地における「蚊とはえのいない生活」が最終的に実現したものと考えられる。武庫之荘住宅地では，蚊・ハエの発生と，内水氾濫という環境・衛生問題の帰結が周辺農村の全面的な市街地化を前提とした点で，まさに軌を一にしたのである。

おわりに

以上の武庫之荘住宅地における「蚊とはえのいない生活実践運動」の検討を通じて，次の諸点を指摘しうるだろう。

第一に，武庫之荘住宅地では，蚊・ハエの発生に周辺農村の存在が基底的な影響を及ぼしていた点である。それゆえ，武庫之荘住宅地における「蚊とはえのいない生活」の実現に際しては，周辺農村の全面的な市街地化が必要であった。しかしながら，周辺農村の全面的な市街地化に至る過程において，武庫之荘住宅地では内水氾濫に伴う床下浸水が頻発し，住民らは二重の環境・衛生問題にさらされることになる。内水氾濫もまた蚊・ハエの発生源となっていたことから，周辺農村の全面的な市街地化と十全な排水施設の整備によって，武庫之荘住宅地における「蚊とはえのいない生活」が最終的に実現に至った。

第二に，武庫之荘住宅地では，民間業者委託による家庭ゴミの収集が実施されたという点である。尼崎市による清掃事業が充分に機能していない中で，武庫之荘文化会は，主にハエの撲滅を目的として，各世帯の負担と尼崎市の補助金で民間業者委託による家庭ゴミの収集という方式を 1960 年から採用した。かかる方式は，1960 年代末から尼崎市が週 3 回の定時収集を実施したことで廃止に至った。尼崎市の行政サービスが拡充することによって，武庫之荘文化会が地域社会で果たしうる主要な機能の一つを喪失したのである。この点は，武庫之荘住宅地の住民らが頻発する内水氾濫への不安を抱えながら生活せざるをえないにもかかわらず，武庫之荘文化会が採りうる有効な方策がなかったこととも関連する。以上は，主に「近代家族」から成る武庫之荘住宅地において，住民らが地域住民組織よりむしろ行政との結びつきを強める一連の過程であったといえよう。

最後に，主に「近代家族」から成る武庫之荘住宅地において，家内領域を担う女性らが「蚊とはえのいない生活実践運動」などの地域社会に関する諸問題に対処すべきという認識を，公共領域を担う男性らは共有した点である。かかるジェンダー化された認識の下で，男性の役員から構成される武庫之荘文化会が「地区衛生協力態勢」の構築や婦人部の再結成を主導し，武庫之荘住宅地の女性らの組織化を試みた。しかしながら，「近代家族」という形態の下では各世帯の独立性が高く，家内領域を担う女性の多くが家事・育児（教育）を優先させる中で，かかる組織に対する主体的な参加を女性らに求めることは困難であった。

逆に，再結成後の婦人部を通じて地域社会に関与する女性らは，公共領域を担う男性らが共有し

ていたジェンダー化された認識を内面化するに至る[97]。それがために，女性間の地域社会に対する温度差がより一層拡大したものと考えられる。この点に関する考察は，他日を期したい。

参 考 文 献

論文・書籍（articles & books）

尼崎市都市開発局区画整理部区画整理課編『区画整理の歩み――土地区画整理法施行 25 周年記念』，1981 年 [Amagasaki-shi Toshi Kaihatsu-kyoku Kukakuseiri-bu Kukakuseiri-ka ed., *Kukaku Seiri no Ayumi: Tochi Kukaku Seiriho Shiko 25 Shunen Kinen*, 1981]

尼崎市の清掃事業史発刊委員会編『尼崎市の清掃事業史』尼崎市環境事業局，1988 年 [Amagasaki-shi no Seiso Jigyoshi Hakkan Iinkai ed., *Amagasaki-shi no Seiso Jigyoshi*, Amagasaki-shi Kankyo Jigyo-kyoku, 1988]

大門正克編著『新生活運動と日本の戦後――敗戦から 1970 年代』日本経済評論社, 2012 年 [Okado, Masakatsu ed., *Shin Seikatsu Undo to Nihon no Sengo: Haisen kara 1970 Nendai*, Nihon Keizai Hyoronsha, 2012]

落合恵美子『近代家族とフェミニズム』勁草書房，1989 年 [Ochiai, Emiko, *Kindai Kazoku to Feminism*, Keiso Shobo, 1989]

京阪神急行電鉄株式会社編『京阪神急行電鉄五十年史』, 1959 年 [Keihanshin Kyuko Dentetsu Kabushikigaisha ed., *Keihansin Kyuko Dentetsu 50 Nenshi*, 1959]

澤田るい「戦後日本における「蚊とはえのいない生活」実践運動の展開――教育映画『百人の陽気な女房たち』の分析から」『文化資源学』13，2015 年 [Sawada, Rui, “Sengo Nihon ni okeru ‘Ka to Hae no inai Seikatsu’ Jissen Undo no Tenkai: Kyoiku Eiga ‘100 nin no Yoki na Nyobo Tachi’ no Bunseki kara”, *Bunka Shigengaku*, No. 13, 2015]

沢山美果子『近代家族と子育て』吉川弘文館，2013 年 [Sawayama, Mikako, *Kindai Kazoku to Kosodate*, Yoshikawa Kobunkan, 2013]

関なおみ「戦後日本の「蚊とハエのいない生活実践運動」――住民参加と国際協力の視点から」『国際保健医療』24–1，2009 年 [Seki, Naomi, “Sengo Nihon no ‘Ka to Hae no inai Seikatsu Jissen Undo’ : Jumin Sanka to Kokusai Kyoryoku no Shiten kara”, *Kokusai Hoken Iryo*, Vol. 24, No. 1, 2009]

大日本帝国市町村地図刊行会編『兵庫県武庫郡武庫村土地宝典』，1941 年 [Dai Nihon Teikoku Shichoson Chizu Kankokai ed., *Hyogo-ken Muko-gun Muko-mura Tochi Hoten*, 1941]

高嶋修一『都市近郊の耕地整理と地域社会――東京・世田谷の郊外開発』日本経済評論社, 2013 年 [Takashima, Shuichi, *Toshi Kinko no Kochi Seiri to Chiiki Shakai: Tokyo Setagaya no Kogai Kaihatsu*, Nihon Keizai Hyoronsha, 2013]

出口雄大「一九三〇年代日本における農村の市街地化と土地問題――兵庫県武庫郡武庫村を事例に」『史学雑誌』127–1，2018 年 [Deguchi, Yudai, “1930 Nendai Nihon ni okeru Noson no Shigaichika to Tochi Mondai: Hyogo-ken Muko-gun Muko-mura wo Jirei ni”, *Shigaku Zasshi*, Vol. 127, No. 1, 2018]

出口雄大「阪急武庫之荘住宅地の社会資本整備過程――1930～60 年代を中心に」『社会経済史学』84–2，2018 年 [Deguchi, Yudai, “Hankyu Mukonoso Jutakuchi no Shakai Shihon Seibi Katei: 1930-60 Nendai wo Chushin ni”, *Shakai Keizai Shigaku*, Vol. 84, No. 2, 2018]

(97) 例えば，「大体武庫之荘はベッドタウンで昼間の住人はもとより圧倒的に女性，男の方は武庫之荘では寝ることと，食事をする時間ばかりで，まあ言うて見たら下宿人のようなもので，この地区の文化を本当に背負っているのは殆んど女性だからではないでしょうか。（略）何と言っても子供の教育と躾は女性の責任。この子供達が次代の文化を担うのですから将来の武庫之荘の文化を築くのもこれまた今の女性でしょう」（婦人部長　藤沢喜佐子「ごあいさつ」『武庫之荘文化会報』224，1977 年 5 月）など。

出口雄大「阪急武庫之荘住宅地における地域社会の形成――地域住民組織の視点から」『日本歴史』847, 2018年 [Deguchi, Yudai, “Hankyu Mukonoso Jutakuchi ni okeru Chiiki Shakai no Keisei: Chiiki Jumin Soshiki no Shiten kara”, *Nihon Rekishi*, No. 847, 2018]
出口雄大「武庫之荘文化会の収支決算――一九七〇年代以降を中心に」『地域史研究』119, 2019年 [Deguchi, Yudai, “Mukonoso Bunkakai no Shushi Kessan: 1970 Nendai Iko wo Chushin ni”, *Chiikishi Kenkyu*, No. 119, 2019]
沼尻晃伸『村落からみた市街地形成――人と土地・水の関係史　尼崎 1925～73 年』日本経済評論社, 2015年 [Numajiri, Akinobu, *Sonraku kara mita Shigaichi Keisei: Hito to Tochi Mizu no Kankeishi, Amagasaki 1925–73 Nen*, Nihon Keizai Hyoronsha, 2015]
橋本正巳「蚊とハエのいない都市の建設」『市政』4–8, 1955年 [Hashimoto, Masami, “Ka to Hae no inai Toshi no Kensetsu”, *Shisei*, Vol. 4, No. 8, 1955]
橋本正巳「蚊と蝿のいない生活」『体育の科学』5–8, 1955年 [Hashimoto, Masami, “Ka to Hae no inai Seikatsu”, *Taiiku no Kagaku*, Vol. 5, No. 8, 1955]
満薗勇『商店街はいま必要なのか――「日本型流通」の近現代史』講談社現代新書, 2015年 [Mitsuzono, Isamu, *Shotengai ha ima Hitsuyo nanoka: ‘Nihongata Ryutsu’ no Kingendaishi*, Kodansha Gendai Shinsho, 2015]
武庫之荘文化会編『武庫之荘文化会 60 周年記念誌』, 2010年 [Mukonoso Bunkakai ed., *Mukonoso Bunkakai 60 Shunen Kinenshi*, 2010]
森武麿編著『1950 年代と地域社会――神奈川県小田原地域を対象として』現代史料出版, 2009年 [Mori, Takemaro ed., *1950 Nendai to Chiiki Shakai: Kanagawa-ken Odawara Chiiki wo Taisho toshite*, Gendaishiryo Shuppan, 2009]
山中健太「戦後南予における「蚊とハエのいない生活」の展開――喜多郡旧五十崎町から宇和島市石応へ」『日常と文化』5, 2018年 [Yamanaka, Kenta, “Sengo Nan’yo ni okeru ‘Ka to Hae no inai Seikatsu’ no Tenkai: Kita-gun Kyu Ikazaki-cho kara Uwajima-shi Kokubo he”, *Nichijo to Bunka*, No. 5, 2018]

資料等（materials）

『尼崎市議会報』号外 6, 1961年 [*Amagasaki Shigikaiho*, extra No. 6, 1961]
『尼崎市歳入歳出決算書』, 1952年度, 1962年度, 1963年度 [*Amagasaki-shi Sainyu Saishutsu Kessan Sho*, 1952 Nendo, 1962 Nendo, 1963 Nendo]
「「蚊とはえのいない生活」の実践運動に関する件」（厚生省発衛第 225 号）, 1955年 [“‘Ka to Hae no inai Seikatsu’ no Jissen Undo ni kansuru Ken”, Koseisho Hatsuei No. 225, 1955]
「「蚊とはえのいない生活」の実践運動に関する件」（厚生省発衛第 230 号）, 1955年 [“‘Ka to Hae no inai Seikatsu’ no Jissen Undo ni kansuru Ken”, Koseisho Hatsuei No. 230, 1955]
「『蚊とはえのいない生活』の実践運動に関する件参考資料」, 1955年 [“‘Ka to Hae no inai Seikatsu’ no Jissen Undo ni kansuru Ken Sanko Shiryo”, 1955]
『月刊あまがさき』3–5, 1966年 [*Gekkan Amagasaki*, Vol. 3, No. 5, 1966]
『月刊あまがさき』4–8, 1967年 [*Gekkan Amagasaki*, Vol. 4, No. 8, 1967]
『第十三回尼崎市議会定例会会議録』1, 1961年 [*Dai 13 Kai Amagasaki Shigikai Teireikai Kaigiroku*, No. 1, 1961]
『第 7 回尼崎市議会定例会会議録』2, 1964年 [*Dai 7 Kai Amagasaki Shigikai Teireikai Kaigiroku*, No. 2, 1964]
『武庫之荘文化会報』, 武庫之荘文化会所蔵 [*Mukonoso Bunkakaiho*, Mukonoso Bunkakai col.]

要旨: 本稿は，戦後日本で展開した「蚊とはえのいない生活実践運動」について，阪急電鉄が建設した武庫之荘住宅地を事例に，地域社会の視点から検討したものである。主に「近代家族」から成る武庫之荘住宅地では，家内領域を担う女性が「蚊とはえのいない生活実践運動」を主導すべきであると公共領域を担う男性から認識されたものの，「近代家族」であるがゆえに各世帯の独立性が高く，女性の組織化は困難であった点を明らかにした。

キーワード: 「蚊とはえのいない生活実践運動」，近代家族，都市化，地域社会，内水氾濫